

編集後記：8月下旬、JR常磐線から見える千葉・茨城県境の利根川の表情が一変しました。上流域での豪雨のために、普段、堤防間の7分の1ほどしかない川幅が兩岸にまで達し、運動公園やゴルフ場などの河川敷の施設が全て水没し、周囲の住宅地より水位が高くなっているかのように見えました。1886年に本格的な治水事業が始まった国内で最も整備された河川の一つ（柳田邦男著「事故調査」より）であり、幸いにも洪水は起きませんでした。自然の脅威を目の当たりにさせられました。

今年の夏は中国・揚子江流域での大洪水（新聞によると、日本の全耕地面積に相当する範囲で作物が壊滅的打撃を受け、水に浸かった面積はその4倍にも達するという）、8月上旬の新潟の集中豪雨、下旬の栃木・福島から東北・北海道にかけての豪雨と河川の氾濫等々、水にかかわる災害が多発し多くの人命と財産が失われました。

8月下旬の災害の直後、新聞・テレビで数人の学会

員が今回の豪雨やその背景にあるこの夏の異常気象の原因を色々な角度から解説していました。今後、解析が進み、長期・短期の予報精度の向上へと結びつくことを願いますが、正直言って、「予報が当たっても流された家・水に浸かった作物は帰ってこない。結局は、景気対策が見え隠れする災害復旧工事と治水事業に頼るしかないのか。」という虚しさも感じます。

それはさておき、会員の投書をきっかけに今年から修士・博士の学位論文紹介の投稿規定・手順を大幅に変更しました。電子メールの一般化を睨んでのことですが、指導教官等の研究室の代表者に気兼ねすることなく自主的に投稿できるように変えました。過去3年度分まで受け付けますので、今回投稿し忘れた方は来年投稿できます。編集書記・担当者の事務量が増大しますが、会員の皆さんに電子メールを使っていただくと編集作業が合理化されます。御協力をお願いします。

（大泉三津夫）